

近い中世の史実をもとにしているだけに説得力をもっていて、一概に俗説として退けるわけにはいかない。

五つの城は、城が五つということではなく、たくさん城という意味であろう。そうした発展を約束された、地域の中心となる土地という意味と額望をこめて幕末ごろにはかなり使われていた地名を、町の名前に採用したことは、それだけに立派な史実と考えてよい。もうそれだけの歴史的な時間も経過しているのである。

なお、「ゴジョウノ目」か「ゴジョウ目」かは、明治29年1月18日付「県報」の告示の部に掲載されているのが、今日に残る唯一の史料である。はっきりと「ゴジャウメ」と読みがなをしてある。「ノ」の字はない。

○秋田県告示第四号

明治二十三年法律第七十七号二依り管下南秋田郡

五十目村ヲ^{ゴジョウメチ}五城目町ト改称ス

明治二十九年一月十八日

秋田県知事 平山靖彦

村からの申請には読み方についてはなにも触れていなかったが、いつからかは不明であるが現実には「ゴジョウノ目」とよばれるようになった。やがて本当の町名の「ゴジョウ目」という人が多くなった。五カ町村合併の新五城目町は「ゴジョウ目」である。

五城目町史から引用

目（め）について

真ん中の意味。五城目は古くは「イソメ」あるいは「イソノメ」といい、川岸の石原のところの真ん中の意味だったものが、当て字が音読みされたりしているうちにそうなったと考えられています。語尾に「目」のつく地名はあちこちにありますが、真ん中の意味と考えて良いと思います。

2002年 秋田地名研究所事務局 新屋正隆

ごぜんやなぎ【御前柳神社】

御前柳神社の由来 永禄年間（1558～1569）檜山の安東実季と湊城主・友季との同族争いにまきこまれた浦城主・三浦兵庫守盛永は実季の大軍に攻められ討ち死にしてしまいました。その時奥方（松前・島守信広の娘で名は小柳姫）は身重の体で5歳になる千代若とともに舟で城をのがれましたが、小池集落のこの地で急に産気づき、老柳の洞で男子を産んだ後、腰元7人とともに命を断ち、夫の後を追いました。

父母を失った千代若はその場に祠を建て柳の木を植えて母の霊を慰め、無事逃れたといひます。元亀元年（1570）9月1日、姫18歳のときと伝えられています。

神社は浦城主・三浦氏一族の悲劇物語に由来しています。柳のあった所に御前柳大明神があって、安産の神として、住民の信仰を集めています。神社の前には小さな板碑が10数個輪になっています。

小さな板碑

御前柳神社前には、大小12、3個のの板碑が並んでいます。刻まれている文字が風化して判別できません

“菅江真澄も歩いた歴史の道「羽州街道」”から

NTT東日本秋田支社

こだてはな【五城目町浦横町小立花】

こだてばな

もとは小館塙か。花は塙のことで小高い所の意。県北にも小館花という地名がある。この場合は台地の館が名前の由来。

1987年三浦鉄郎著 新編・秋田の地名

こだてはな〈五城目町〉

小館花・小館端とも書く。高岳山の東南麓に位置し、浦城址の東端部を占める。